IV－126

都市生成要因に関する地域学的研究

北海道大学工学部　正員　小川博三

学生員　○山田隆二

目的　土木計画者は地域計画を行なう時に地域の核である都市を中心として計画を立案する。故に都市の本質から離れた計画とは全て無意味なものとなってしまう。しかるに都市は多面の相を有する有機体でありその時代と共に変転する全貌を全ての相にわたり把握する事は不可能である。よって都市の本質を知るためには都市の原初的段階に立ちもどりその本質を明らかにしなければならないのである。

しかしながら世界のかり当する都市を全てにわたり研究する事は時間的にも困難であり直接関係の無い条件により根本条件を抽出しおとす恐れがある。そこで一般の土木工学的研究と同じくニヒ的条件を取り去った実験室を設定して研究する必要がある。この実験地として都市が比較的単純な外的条件の中に存在する古代タリム盆地があげられる。

本研究はこの地域を中心として歴史資料を基として都市の基本条件を究明したものである。

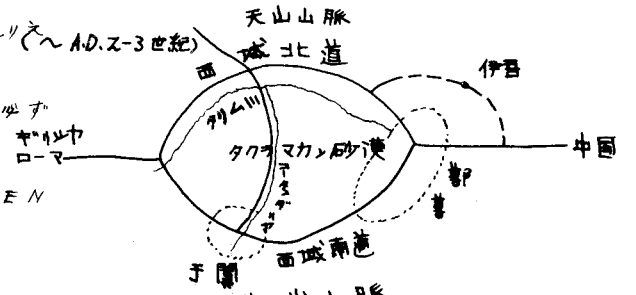
方法と分析　現在まで多くの土木工学者が土木的立場より都市の本質を論じてきたがその方法には種々のものがある。筆者は本研究の基本資料として中国の古文献を使用して研究したものである。

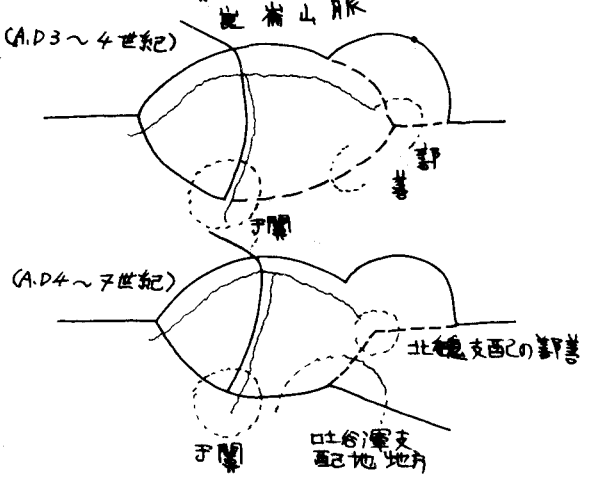
当時の都市は水を都市外の地域から水路を使用して導いており衣食は交通によって外部から供給を受けていたためである。住居はいかなる地域でも造りうることにより都市成立の制約力は小さかった。

しかしながら宗教、防御交通は当時の都市全てに必ず存在したものであった。

ここで都市の盛衰とSEIDENSTRASSEN（絹の道）の盛衰の対比を行なってみる。

タリム盆地交通路図





盛衰対比表

B.C. 2	1	0	A.D. 1	2	3	4	5	6	7
西域南道									
匈奴支配下で繁栄	漢の支配下で繁栄			次第に伊吾路に力奪わる		吐谷渾の下で新路使い繁栄			
鄯善									
交通の中心として後漢時代をピークとして繁栄					衰退進行	分裂し吐谷渾支配地方は栄える			
于闐									
全体を通じて衰えをみせない									

以上の現象よりSEIDENSTRASSENの重要拠点に位置して栄えていた鄯善国が新交通路の開拓につれてその統一力を失い遂には二分してしまう事が明らかとなる。しかも旧鄯善国の西半分を経由する新交通路が使用されるにほぼ西半分の地方は以前にも増して繁栄したのであった。

次に人間の集団形成の過程と都市の関係を調べると次の様である。人間は初期の段階において家族単位的小集団で居住地をかまえていた。その後集団が大きくなって聚落を形成する様になりより発展した段階のものが都市である。現在都市がさらに巨大化して大都市という広地域包含的なものとなってきている。この様な発展過程を有する都市は当然その基本条件の内に居住地としての条件聚落としての条件を有し大都市はさらに都市としての条件を包含する。

故に上記の基本条件を本研究の対象都市の基本条件と対比させて表化し現在の大都市の成立基本条件を明確化したものが右の表である。右の表より人間の生活形態の変化と共にその基本条件の推移が存在することがわかる。その推移は原初的都市において防御宗教交通を必須の条件とし、それが現代の様な大都市となると防御宗教の条件が重要性を失いつつある事は明白である。その結果最後に残った条件が交通である。故に次の様に言える。

基本条件＼発展形態	居住地	聚落	原初的都市	現代の大都市
水	○			
衣食住	○			
防御		○	○	
宗教		○	○	
交通			○	○

但し○印は必須条件を表わす

現代の都市は交通無くして存在しえないものである。

結論　地域は都市を核として成立し地域の力は都市を媒介として掌握されている。よって交通を媒体として都市と地域は結びつき密接不離の関係を保ち高度の文明を展開させている。

故に交通を省いた地域計画は無く地域をのぞいた交通計画も無い。

現在の地域計画は都市と地域の均衡のとれた関係を樹立する事であると言える。よって地域と密接不離の関係にある都市と言う核の基本条件たる交通を常に中心に置き地域の計画をしなければならない

即ち地域計画とはその中核として交通の計画を考えねばならない。小論は数に到る過程を歴史的に把握するためにSEIDENSTRASSENの都市群をとって究明を試みたものである。

なお、この研究は文部省の科学研究費（総合研究）によるものの一部として行ったものである。

〔基本資料〕

正史関係：　史記　漢書　後漢書　晋書　魏書　周書　隋書　旧唐書

他の古文献：　山海経　仏国記　大唐西域記　通典　洛陽伽藍記　敦煌県志